

令和 2 年 5 月 22 日現在

機関番号：24402

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13848

研究課題名（和文）不倫・浮気・姦通言説の歴史社会学的研究

研究課題名（英文）Historical sociology of extramarital relationships

研究代表者

松木 洋人 (Matsuki, Hiroto)

大阪市立大学・大学院生活科学研究科・准教授

研究者番号：70434339

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近現代日本における婚外性愛をめぐる言説を収集したうえで、日本社会における家族規範のありように新たな光を当てようとするものである。研究期間内に執筆した2つの論稿においては、新聞紙上の人生相談を分析することを通じて、配偶者の婚外性愛と自分の婚外性愛についての相談および回答が、結婚と性愛の関係をめぐるどのような規範によって成り立っているかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2010年代半ばから著名人の「不倫」が繰り返しマスメディアで取り上げられることに象徴されるように、婚外での性愛関係は非常に社会的関心の高いテーマであるにもかかわらず、社会学的研究の対象となる機会は少なかった。このような状況において、本研究は婚外性愛を問題化する社会的規範の歴史性・社会性を社会学的視点から捉え直そうとするものである。また、この規範は家族の近代性という家族社会学の原問題とも深く関わるものであり、その用法について明らかにする本研究成果は、家族社会学研究にとっても一定のインプリケーションを有するものであると考える。

研究成果の概要（英文）：This study tries to collect the discourse on extramarital relationships in modern Japan and then shed new light on the family norms in Japanese society. In two papers written during the research period, based on the analysis of newspaper advice columns, I examined how consultations and answers regarding spouse's extramarital relationships and their own extramarital relationships were accomplished by the normative (dis)connections between marriage and sexuality.

研究分野：家族社会学

キーワード：社会学 家族社会学 不倫 浮気 姦通

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

社会学において、愛と性と結婚とを一体のものとして結びつける規範は、ロマンティック・ラブ・イデオロギーと呼ばれて、近代家族を構成する重要な要素であると捉えられてきた。近代社会の成立にともなって、愛と性と結婚の3つが規範的に結合することによって近代家族が形成される。それゆえに、この結合の規範からの逸脱を示す浮気や不倫と呼ばれる現象の広がり、近代社会からの時代の転換を示すものともなる。不倫や浮気と呼ばれるような既婚者が婚外で性愛を伴う関係を持つことは、未婚者どうしの結婚を前提としないセックスなどとともに、このような現象の1つである。つまり、既婚者の婚外性愛に関する規範は、近代家族、ひいては近代社会の成立と揺らぎを把握するための重要なメルクマールなのである。このように、既婚者の婚外性愛に関する規範とその変容は、日本家族の近代性と脱近代化のありようを把握するにあたって重要な論点であるにもかかわらず、経験的な資料を用いた社会学的な実証研究はほとんど行われていないのが現状であった。

2. 研究の目的

本研究は、上記のような研究状況に着目して、日本社会における既婚者の婚外性愛に関する言説の歴史社会的な考察を試みるものである。具体的には、明治・大正期から現在に至るまでの雑誌・新聞・書籍における既婚者の婚外性愛に関する言説を広く収集したうえで、歴史社会的な言説分析を行う。それらの言説において、愛と性と結婚という3つの要素がどのように規範的に結合したり分離したりしているのかに注目することによって、日本社会において、既婚者が婚姻の外部で性愛を伴う関係を持つことが、どのような論理を通じて、いかなる意味を与えられてきたのか、そして、それらの論理や意味がどのように歴史的に変容してきたのかを明らかにすることが目的である。

3. 研究の方法

本研究は、明治・大正期から現代に至るまでの日本社会における既婚者の婚外性愛についての言説を渉猟して、その歴史的变化を探るという方法を採用。各種のデータベースや検索システム活用して、雑誌記事・新聞記事・書籍のうち既婚者の婚外性愛に関するものを収集する。この資料収集作業と並行して、資料の一部を対象にした分析を実施する。特定の年代区分に該当する様々な媒体における言説を対象にして、既婚者の婚外性愛について何がどのような規範的論理の使用のもとで語られているという作業を繰り返すことによって、明治・大正期から現在に至るまでの既婚者の婚外性愛をめぐる規範の歴史の変遷にアプローチしようとするものである。

4. 研究成果

(1)本研究の成果としては、まず、収集された資料の集成が挙げられる。具体的には、配偶者や自身の婚外性愛についての悩みが頻繁に取り上げられている読売新聞の人生相談欄である「人生案内」の記事のうち、特定の月に掲載されているものをピックアップして収集し、「Web OYA-bunko」を用いて、雑誌記事部分については、婚外性愛をトピックとする2010年代の雑誌記事を収集し、婚外性愛を題材とする書籍もいくつか収集した。

そのうえで、本研究期間については、資料の分析とそれにもとづく論稿の執筆に注力した。その結果として、2つの研究ノートを学会誌に投稿し、掲載あるいは掲載が決定した。以下、その知見の概要を記す。

(2)2019年に刊行された1つめの研究ノートは(松木 2019) 配偶者の婚外性愛について語るといふ実践が、どのような結婚と性愛をめぐる規範的論理によって可能になっているのかを例証することを試みた。その結果として、以下のことが明らかになった。まず、性愛と結婚を結びつけるロマンティック・ラブ・イデオロギーは、相談者による配偶者の非難を可能にする一方で、「正しさ」を欠いた結婚の解消を回答者が説くうえでも用いられる。それに対して、この結びつきを前提として、個別的に婚外の関係が「真剣」か否かを区別する「浮気の論理」を用いること、さらには、配偶者が「真剣」な「不倫」関係にある場合でも、原理的に夫婦であることと性愛の結びつきを切断することを通じて配偶者の「不倫」と自分の人生を無関連化することによって、離婚を勧めるのではない回答が現代の日本社会では可能になっている。

(3)これに対して、2020年度に刊行予定の2つめの研究ノートは(松木 2020) 自分自身の婚外性愛についての相談とそれに対する回答がどのように編成されているかを分析している。さらに詳細について述べれば、以下の通りである。相談者は自身を非難したり、自らの感情やふるまいを自由意志を欠くものとして記述したり、「正しさ」を欠いた結婚生活に替えて、より「正しい」結婚生活を始めることができないという「道徳的な悩み」を語ったりすることで、悩みの相談を相談とそれに応じた助言に値するものとして編成する。回答においては、ほとんどの場合、婚外での関係の解消と新しい結婚生活のいずれが是とされるかは二者択一で、婚外での関係と現在の結婚生活の「両立」を認める回答は数のうえで例外的であるのみならず、回答者によって例外として構成されたりもする。これらの意味で、結婚と性愛を結びつける規範からの逸脱である自分の婚外での性愛についての相談とその回答は、その理解可能性を当の規範によって支えられている。

これらの成果は、特定の年代における個別的な状況のなかで、結婚と性愛の関係をめぐる規範が、どのように人々によって用いられているのかを例証になっている。

<引用文献>

松木洋人（2019）「配偶者の婚外性愛についての相談に対する回答を可能にする規範的論理：新聞紙上の人生相談を題材とした探索的分析」『比較家族史研究』33:116- 134.

松木洋人（2020・掲載決定）「自分の婚外性愛についての相談／回答はどのように成し遂げられるのか：新聞紙上の人生相談記事を題材とした探索的考察」『家族研究年報』45.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松木洋人・中西泰子	4. 巻 43
2. 論文標題 家族研究と政策提言 少子化対策に焦点を当てて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 家族研究年報	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 松木洋人	4. 巻 33
2. 論文標題 配偶者の婚外性愛についての相談に対する回答を可能にする規範的論理 新聞紙上を人生相談を題材とした探索的分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比較家族史研究	6. 最初と最後の頁 2-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 松木洋人	4. 巻 68(1)
2. 論文標題 家族社会学における構築主義的アプローチの展望：定義問題からの離脱と研究関心の共有	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 25-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 松木洋人	4. 巻 44
2. 論文標題 岩上真珠の軌跡からみる戦後日本の家族社会学：ライフコースという到達点と家族をめぐる「消失の物語」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 家族研究年報	6. 最初と最後の頁 61-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松木洋人
2. 発表標題 NFRJ18質的調査の対象と思想
3. 学会等名 日本家族社会学会第29回大会 テーマセッション「第4回全国家族調査（NFRJ18）：特徴と現状」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 永田夏来・松木洋人編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 新泉社	5. 総ページ数 240
3. 書名 『入門 家族社会学』	

1. 著者名 相馬直子・松木洋人編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 『子育て支援を労働として考える』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----